

第6回「アフリカ論公開授業」

「ガーナにおける国際協力の現場」

JICA 資金協力業務部次長 荒木 康 充
国際学部教授 阪 本 公美子

開催期日：2023年6月29日（木）12：40～14：10

開催場所：4 A31教室 参加者：44名

多文化公共圏センター事業の「グローバルサウスとの共創」の「日本の国際経協力」プロジェクトの一貫として、講師にJICA資金協力業務部次長の荒木康充さん（2023年3月までJICAガーナ事務所所長）をお迎えして、「アフリカ論」公開授業を行った。

講義内容は「ガーナにおける国際協力の現場」である。荒木さんは、直近10年に及ぶアフリカ勤務（ガーナ事務所、本部アフリカ部、ウガンダ事務所）のご経験があり、コロナ禍対応やガーナ政府の財政危機等を経験された。困難に直面しながら、チームとして対応してきたご経験を、ざっくばらんにお話頂いた。

1. コロナ禍での事業推進

コロナによるパンデミックは世界中に大きな影響を与えた。ガーナでも国境は封鎖され、JICAガーナ事務所に勤務する日本人スタッフの大半は日本への退避を余儀なくされた。現地ではコロナに立ち向かう医療関係者がおり、PCR検査の中心的な役割を担ったのが、日本がこれまで長年支援してきた野口英世記念・医学研究所（通称「野口研」）であった。彼らは日夜問わず24時間体制でPCR検査を行う体制を整え、日本でも実施できなかった追跡調査を可能にしていた。JICAからも医療用マスク、グローブ、防護服や検査機材を供与し、彼らの

活動が途切れることがないように支援した。その奮闘ぶりは内外のメディアでも大きく取り上げられ、日本のメディアからも多くの関心をいただいた。2020年9月に行われた国連総会では、菅首相の演説の中で、コロナ禍におけるガーナ「野口研」の貢献が紹介され、世界に彼らの努力が共有される結果になった。

その他の事業も「現場を止めない」を合言葉に、退避した日本人スタッフとガーナにいる現地スタッフとが物理的な距離をもとめせず、Web会議やメールを通じて打合せ、カウンターパートと協力し、活動を継続させることができた。地理的には離れてはいたが、チームとして見事に機能していた。「チーム・ガーナ」が実を結んだ瞬間だったと振り返る。

2. 事務所マネジメント

コロナ禍で日本人スタッフは退避組と残留組とに分かれ、事務所では最小限の人数でオペレーションできる体制を築いた。しかし、現地スタッフの間でも不安が募る。まずは在宅勤務の体制を構築する必要があった。そのためには、現地スタッフにPC、WiFi端末の貸与と通信費の補填が不可欠であった。また各机にアクリル板で作った飛沫拡散防止の壁を設置するなど、事務所内の感染防止策を徹底した。一方、当初想定していなかった事態が起きた。退避組の日本人スタッフから不安と不満が挙げられるようになったのだ。彼らは日本で在宅勤務して

いるが、孤独なうえに、いつ現地に戻れるかさえわからない状況に不安を募らせていた。またどのように遠隔で事業を実施するのか試行錯誤が続いていた。彼らの不安や不満に耳を傾けるために、毎週一人ひとりに必ず電話を掛け話を聞くようにした。時には一人に対し1時間以上も話すことがあった。徐々に安定してきた退避組は、時差や在宅勤務など制約がある中でも、問題が発生すれば一両日中に日本側関係者と調整し対応策をまとめ、また事務所では現地スタッフが率先して先方関係者との調整をこなしてくれた。大きな試練を克服することにより、事務所の結束が強まっていった。

2020年10月にはガーナ国際空港が再開し、退避組も戻ってきた。これまでの結束をより強固にするためには、目指すべき目標が必要であった。マラソンではトップを走るランナーのことをLeading Runnerという。ここからヒントを得て、アフリカ（31事務所）で1番の事務所になるという目標を設定し、“Leading Office”と命名した。翌年にはTICAD会合（アフリカ各国の首脳級でアフリカ開発を話し合う会合）が予定されていた。同会合では、重要セクターや課題毎に優良事例を紹介するサイドイベントが設定される。同サイドイベントの優良案件事例として、ガーナのフラッグシップ・プロジェクトが紹介され、プロジェクトに取り組むガーナのカウンターパートが登壇することを目標指標として取り組んだ。結果は、各担当スタッフの頑張りもあり、4案件で登壇できトップクラスの成績であった。

3. Ghana Beyond Aid政策と債務危機

ガーナ政府は現政権が誕生した2017年に“Ghana Beyond Aid（援助からの脱却）”を打ち出した。歴史的に英国による植民地政策が長く続いた影響もあり、知らず知らずのうちに他者への依存体質が出来上がっている。現政権が

発表した“Ghana Beyond Aid”は経済的自立を目指した素晴らしい方針であるが、実情は十分な予算措置ができず、外部援助機関からの資金に依存する状態が恒常化していた。ガーナ政府はこれらを解消するため、独自にユーロ債を発行し、国際金融市場からの資金調達に成功した。調達した資金をもとに、コロナ禍の医療従事者や市民生活を支えるため、医療従事者への保険加入と特別給与加算、また水・電気料金の無料化など実施した。しかしながら、ウクライナ紛争を機に為替と物価が上昇し、積極的な財政支出が裏目に出る結果となった。独自再建に拘る財務大臣に対し、早々にIMF支援を依頼すべきだとの主張が大勢となった。国会では、財務大臣の判断の遅さがさらに財政を悪化させたと責任を追及する声が上がった。しかしながら、何もしなければ、状況はここまで悪化することはなかったかもしれないが、悪化の傾向は続き、遅かれ早かれ同様な事態を招いていたことは確かだ。自ら方向性を示し、それに向かってアクションを取る姿勢は、少なくとも評価されるべきと考える。

4. ガーナ人は地図が読めない？

ガーナではUberによる民間タクシーが流行っている。スマートフォンのマップで乗車場所と行き先を指定すると、時間に余裕がある車が迎えに来て輸送してくれるシステムである。確かに当初は地図が読めず「どっちに曲がればよいのか」と聞いてくるドライバーもいたが、今では何も言わなくとも目的地まで連れて行ってくれる。必要があれば地図の読み方も理解できるようになる。ガーナの人は〇〇ができないという発想は正しい評価ではない。必要があれば、しっかりと学習する能力があり、日本人と大差はない。



5. 参加者の感想

本フォーラムに参加した「アフリカ論」受講生34名のうち、82.4%が大変有義義だった」と感じ、17.6%が「有意義だった」と評価した。参加者のコメントの一部を以下に紹介する。

JICAの現場での話

- 前回の授業では数字や文字で国際協力のことを知ったが、今回は生の声で事例を知ることができたので良かった。コロナ真ただ中での経験のお話だったが、むしろ他ではなかなか聞くことが出来ないものだと思う。国際協力という分野でももちろんコロナの影響は大きく、そのことは何年も経ってコロナが忘れられてきた頃に、支援額や支援状況などの数字を見るときに忘れてはならないのだと気づかされた。
- 今まで、インターネットや阪本先生の著書『日本の国際協力 中東・アフリカ編』でしかODAの事業内容を知る機会がなかったので、実際に、現地にいる人が現場の雰囲気や環境を見て、事業につなげていったお話を聞くことができ、非常に貴重な体験でした。
- 今回は実際に国際協力の現場に携わっている方のお話であったが、国際協力に関してだけでなく、組織作りや組織運営についてのお話もあり、国際協力以外の部分でも活かせる部分が多かったのが大変興味深かった。特に報連相がなぜ大事なのか、という面に関して、自分が今まで意識して感じていた以外の側面からの説明がありとても納得した。どんな人に仕事を任せたいか、という部分に関し

てはJICAじゃなくとも共通してくる面だと思うので今日学べたことを活かして、課外活動や業務を行っていきたいと思った。

- これまでにJICA職員に興味を持ち、各国の事務所のホームページなどを見たことがありましたが、ここまで事務所内での活動や、問題点、解決に向けて行っているプログラムを詳しく聞くことは今までかなわなかったため、とても有意義な時間となりました。
- 今回の授業でガーナについて、ガーナに対するJICAの支援をより詳しく聞くことができとても貴重な経験だった。私自身将来国際協力に興味を持っているがJICAの支援について内情を知る機会はめったに無かった。具体的なコロナ禍でのガーナでの支援や改革について話して頂いた点も印象的だったが、キャリアの視点で考えた時に荒木さんの人間性や情熱というものが改めて大切だと感じた。
- ガーナ事務所の全メンバーが主体的に取り組めるようになるために、個々の目標を設定し、確認して評価していく。また、ナショナルスタッフも、日本人スタッフと同様に働き、それぞれの能力を引き出して事務所全体の力を伸ばしていく。それらのような体制がとても魅力的だと感じた。自分も、自らの目標に向かって真剣に取り組み、正しく評価されるような職場環境で働きたいと感じた。

ガーナの人のおらかな心について

- ガーナに対して私は「貧しい」という印象を持っていました。しかしそれは一つの側面であって、彼らの人間性を含めてガーナを「認識」できていなかったと気づかされました。支援において何が問題でどこからアプローチをするべきなのか、分析をする必要性を学ぶことができたと感じています。また、支援することにはその地域の人の協力が必要なのだということを再認識しました。日本が途上国を支援しようする際、支援国側の協力が重要

な役割を持つことは、私たちが念頭に置いておくべき概念だと感じました。

●個人的に印象的だったのは、アフリカの方の豊かさ、おおらかさについてだ。以前私がニュースで世界一貧しい大統領という動画を見て受けた印象と同じものを受けた。そのニュースは資産という面では非常に貧しい国の大統領が、豊かな先進国に対して世界の問題について言葉をぶつけるというものであったが、心の豊かさは世界一であると取り上げられていた。いわゆる先進国で生活する私たちが、途上国の人々の心の豊かさから気づきを得るケースは少なくなく、彼らの生活、生き方に触れてみることは豊かな人生を生きる上で重要な意味を持つてくると感じた。

●荒木さんの「アフリカの人々がおおらかな心を持っており、気づいたことを発表できる積極性を持つ」という考えから私たち自身も彼らから学ぶことが多いのではないかと感じた。またアフリカのガーナという国の中でも人々の生活習慣や文化に違いがあり、やはり時間をかけてでも「アフリカ全体」としてではなく地域ごとの問題や改善点に目を向けてそれぞれに合った支援方法を考えていく事が大切なのだと感じた。支援を必要としている地域の中には緊急を要するものもあるだろうが、お話を聞いたように膨大なお金やもちろん人の命もかかっていることから簡単には判断できない部分が課題であるのだと思った。

マラソンに例えて

●お話を聞いて、走ると頭のリフレッシュになって身体的にも精神的にも健康になれそうだと感じたので、何か行き詰まったときなどに長距離走は嫌いですが、走ってみようと思います。

一般参加者から

●コロナ禍でのケニア事務所の対応が印象的で、特に野口記念研究所での3か月の休みなしの活動が素晴らしいと思いました。将来のビジョン

がまだ定まっていませんが、海外で事業をやってみたいと思いました。そして走りたいと思います。

荒木さんは、自ら続けているマラソンに例え、相手に伴走し一緒に汗をかくことの大切さを語っていた。その土地に住んでいない人の意見は、第三者的な見方であり、現地の人には腹落ちはしないことが多い。現地の人々から見ればどのように見えているのか、どのような懸念があるのか、相手側の目線を持つことが求められる。それには対等な立場で一緒に考えることが不可欠になる。若い参加者にも、バトンは引き継がれたと感じたフォーラムであった。

また、以下のフォーラムも実施した。

2023年度多文化公共圏フォーラム第25回

「途上国経済発展論」公開授業

「持続可能な地球社会に向けた革新的政策と制度の考察 ―グローバル・タックス、GBI、世界政府を中心に―」

開催日：2024年1月11日(木) 12:40~14:10

開催場所：4 A31教室 参加者：35名

多文化公共圏センター事業の「グローバルサウスとの共創」の「日本の国際経協力」プロジェクトの一貫として、講師に横浜市立大学で教鞭をとられている上村雄彦先生をお迎えして、「途上国経済発展論」公開授業を実施。講義内容は「持続可能な地球社会に向けた革新的政策と制度の考察 ―グローバル・タックス、GBI、世界政府を中心に―」である。本フォーラムに参加した学生27名のうち90%が「大変有意義だった」、10%が「有意義だった」と評価した。

参考：上村雄彦（2023）「グローバルガバナンスとSDGs」野田真理編『SDGsを問い直す』法律文化社。

<予算・研究費など>

宇都宮大学国際学部ミッション達成支援経費

「途上国経済発展論」公開授業

持続可能な地球社会に向けた革新的政策と制度の考察
ーグローバル・タックス、GBI、世界政府を中心にー

日時 **2024年1月11日** (木)
12:40~14:10

参加無料

事前受付不要

場所 **4A31教室**
(授業参加者定員は会場先着40名)



講師 **上村雄彦 先生**
横浜市立大学国際教養学部教授

大阪大学大学院法学研究科博士前期課程、カールトン大学大学院国際関係研究科修士課程修了。博士(学術)。国連食糧農業機関住民参加・環境担当官、千葉大学大学院人文社会科学研究科准教授などを経て、現在横浜市立大学国際教養学部教授。

コメンテーター **重田康博 先生**
宇都宮大学国際学部客員教授

[問い合わせ先]

宇都宮大学国際学部多文化公共圏センター

Tel: 028-649-5196・5228

E-mail: tabunka-c@miya.jm.utsunomiya-u.ac.jp

※ご参加の際は、香水等の化学香料・たばこ臭などお控えください。
お越しの際は公共交通機関をご利用ください。

作成:国際3年牧野